

思い出の中部学生スキー選手権大会

信州大学(昭和三十五年卒)

河野修

今手元に、「第一回中部学生スキー選手権大会」の古びたプログラムがある。淡い黄色の表紙には、黒い文字で「一九五六 一月二十八日(土)二十九日(日) 於富山県宇奈月スキー場 主催中部学生スキー連盟 主管富山大学スキー部 後援富山県スキー連盟 宇奈月スキークラブ 中部日本新聞社 富山新聞社」と記載されている。大会委員長は、富山大学の伊地知信人さん、大会委員には信州大学から畔上幸雄と富井了、二人とも教育学部在籍で信州野沢温泉の出身。畔上幸雄はよく、野沢温泉に疎開していた時の同級生で、富井了は一期下だ。文学部からは、石川智朗さんと原田哲郎さんとよくが参加した。

一月二十八日午前中はお天気も良かったが、午後からは吹雪混じりの雪だった。滑降競技は午後二時スタート。スタート地点は狭い痩せ尾根だった。雪が容赦なく降り続けて震えるほど寒かった。スタート前、ブッシュの陰で旨そうに煙草を吸っていた石川さんの姿は今でも忘れない。ぼくのスタートは三五番、壁で転倒しスキーを折って棄権。翌日二十九日は、前日より更にひどい猛吹雪の中で行われた回転競技は、一回のみ。石川さんが滑って降りるとすかさず石川さんのスキーを借りて急ぎ履き替え、スタート地点まで駆け登って滑った。厳しい気象条件の中、初めての協議参加だったが、楽しかった。結果は滑降で畔上が二位、富井が三位に入賞。回転は、原田さんが三位、畔上が四位に入賞した。また、リレーは石川さん、原田さん、サッカーで一緒だった繊維学部の藪田さんらが走り、四位に入賞した。新潟大学に次いで総合二位だった。

帰り魚津駅で列車を待つ間、駅前の居酒屋に信州大学各学部の参加者全員が集まり乾杯した。その席でオール信州大学スキー部を結成しようと思いついた。第一回の中部学生スキー選手権大会は、全信州大学スキー部の生みの親でもあった。思うに、あの厳しい気象条件の中で、この初めての大会の推進役となった富山大学の伊地知さん始め、富山大学の皆様方のご尽力には、今でも頭が下がる。

あれから五十年、月日の経つのは早い。改めてこの大会を長年陰に日なたに支えられてこられた役員の皆様には、感謝の気持ちで一杯だ。

第五十回記念大会によせて

金沢大学(昭和三十七年卒)

荻野恭司

中部日本学生スキー選手権大会、五十周年おめでとうございます。私のスキーとの接点は、金沢大学に始まる。この国に来て何か雪に関係することを会得して卒業しようと思った。たまたまバイトにて知り合った先輩がスキー部の方だった。中部インカレへの参加者だったスキー部に入った。合宿に参加した。スキーに夢中になった。あまり上手にならなかったが、雪の中にいるのが楽しかった。

丁度その頃獅子吼で開催された中部インカレに、別の先輩達と参加した。次の野沢大会には、先輩を連れて参加した。この大会が最大の大会であることを先輩達に引き継いだ。それ以後は、先輩達の活躍を新聞紙上で知るだけになった。主な会場が岩岳になったことも知った。その関係で、母校のOB・OG会も岩岳で開かれるようになり、時々

参加するようになった。

平成十三年三月、母校スキー部の四十周年記念大会が岩岳で開かれ参加した。久し振りに旗門をくぐった。タイムは大したことはなかったが、昔を思い出した。さすがに、スピードにはこわさを感じた。年には勝てないが、何時までも楽しめるスポーツであると思う。最近スキー人口の減少が言われているが、誠に淋しい限りである。でも、この大会だけは永く続けて欲しいと願うのは、私一人ではないと思つた。また、五十年と続けて来られた関係者の皆様には、厚く感謝申し上げます。

最後に、この中部日本学生スキー連盟と選手権大会が、今後ますますご発展されますよう記念いたします。

中部日本学生スキー連盟

五十周年を記念して

名古屋工業大学(昭和三十八年卒)

川 端 康 巳

五十周年おめでとございます。我々名古屋工業大学スキー部も二千年に四十周年の記念事業を行ない、今年で四十四年目となります。名工大スキー部は中部日本学生スキー連盟の歴史の大部分に、その一員として共に歩み活動して来たことになりました。この長い年月の間、まだ未熟な学生を支え続けて来られた中部日本学生スキー連盟の理事長、理事を始めとする連盟の方々の勇氣と努力に敬服します。お陰様で名工大スキー部も今日まで焼く二百名余が巣立ち、感謝の念に絶えません。私自身も六十八年から七十二年の間お世話になりました。

正直言つて、大学生活で何が最も印象深く残っているかと言えば、中部インカレの競技です。名工大四十周年記念誌に寄稿していただいたOB諸兄の話題の多くが、中部インカレに関する想い出話です。若い青春の盛りに中部インカレから受けた印象は、強烈に深く我々の記憶に刻まれていることになりました。学生スキー競技部に入り、四年間の部活動をやり通すことは結構大変なことです。一方の単位取りや卒論等の勉強以上に、大事な人間形成の要素が含まれていると思ひます。時差愛に滑るという運動をするまでも、スキー板、金具、靴、ストック、ワックス、チューニング道具、ウエア、ヘルメット、スキー場までの交通手段、宿、そのための費用を稼ぐアルバイト等々多くの準備事項を管理し、更に部活動を成立させるために、特に雪上トレニングではコース取り、ボールのセッティング等多くの作業が必要になります。更には合宿活動等を通してチームワークも身に付け、各々がそれなりに努力と工夫を凝らし、レースでは極度の緊張感を味わい、結果は誰にも言い訳の出来ない自分の責任と、このような諸々の活動、経験を踏むことで、健全な社会人への人間形成が養成されているのだと思ひます。

名工大スキー部が今日あるのも、その環境を支える人の存在が大です。名工大スキー部を創設された現伊藤名誉会長が以前愛知県スキー連盟の副理事長、名城大学教授の小林明彦さんが、中部日本学生スキー連盟常任理事と、学生競技スキーを支える要職の立場に居られることから、常に側面で名工大スキー部OBとして一方ならぬ支援をください、現役学生達に大きな影響を与え続けて来られました。これらの功績もあり、名工大スキー部四十周年記念式典では、名工大柳田学長からご両人に感謝状が贈られました。現在中部日本学生スキー連盟の理事として名工大OBの渡辺隆君が活躍しています。是非頑張ってください。

作今学生数が減り、参加大学も減っているという時代の流れにありますが、我々名古屋工業大学スキー部OB会は、健全な後輩達の成長を願う上でも、中部日本学生スキー連盟と中部インカレ競技が、学生達のより充実したものになるよう、微力ながら一端を荷う努力をして行きたい

と思っっています。

中部日本学生スキー大会の思い出

富山大学(昭和三十八年卒)

中 川 忠

もともと私は、スキーとは深い結びつきがあり、知る人ぞ知る富山県五箇山の出身である。幼少の頃から冬季の半年間は雪の中での生活であり、学校へ行く以外はスキー遊びが日課だった。富山大学に入學して、翌年の冬季実習で志賀高原へ行き、その日からスキー部員となった。諸々の経緯があつて、翌年の中日学生スキー大会を迎えた。

その年は、石川県獅子吼高原スキー場で開催され、アルペン当日は雷雨の中でのスタートだった。ゴールに滑り込むや、靴を脱ぎ中の雨を流し出した。ずぶぬれの靴下を絞りつたが気味悪く、再びぐっしょり濡れた靴の中に足を突っ込んで高原を下りた。当日の成績は、友人と共に7・8位あたりだったと記憶している。

この年の練習程度で8位だったら、来年はがっちり特訓して「入賞を」とひそかに野望を抱き、一年後を目ざして私なりの特訓が始まった。とはいっても、単に乗り物にはなるべく乗らず、ただひたすら歩くこと(お金が惜しかったのも事実)等などだった。十月中旬からは、持久力をつけるために、毎日ランニングを5〜6km行った。当時同じコースを、マラソン・ランナーで有名だった「クラレ」の寺沢徹選手も、同じ時刻に走っていたらしい。また、年末からの合宿は、長野県出身の部員の紹介で飯山温泉の民宿で行ったが、雪が少なくて山頂まで歩かねばならず苦労した。しかし、合宿途中からは雪に恵まれ、

新雪の中での練習だった。自分達で新雪を踏み固めて、コース作りをしなければならぬ時代だった。夜明けと共に、あまり乗気でないかつた者をも無理やり起床させて、雪の降る中での準備体操やコース作りを強制したような印象が残っている。

その年の中日学生スキー大会は、野沢温泉スキー場で開催された。記憶に残る回転競技では、新潟大および名城大の優勝候補の筆頭者がいずれも旗門不通過や、コースアウトで戻されたりするというアクシデントが重なり、最終的には私が繰り上げ優勝となった。一回目のタイムが二位だったことから「もしや……」との野望を追って、二回目は倒れそうになる体を必死に建て直し、全力疾走した結果だったと思う。この時の優勝の栄誉は、技術開発者としての私の人生に大きなプラスとなった。単なる名声だけの意味ではなく、「計画的に努力を重ねれば必ず結果が出るということ」、「物事をアクティブに、そしてプラス志向で考える」という習慣を身に付けることが出来た。

傍らから見れば、野沢大会での優勝者としての記録と、当時の新聞記録しか残っていない。しかし、この優勝という成功を引き金として、社会人となつてからも人生記録の多くが形成されており、私の中には一大エポックとなつて輝いている。「やればできる」、「最後の一秒まで全力を傾注する」というのが私の人生哲学となつて行った。

わが人生とスキー

富山大学(昭和三十一年卒)

高 木 良 造

中部日本学生スキー連盟発足五十周年、誠におめでとございます。私が、富山県宇奈月温泉で開かれた、第一回中部日本学生スキー選手権大会に参加したのは、大学三年生の時であった。滑降競技に出場し、ゴール迄一気に滑ろうと意気込んでスタートしたが、ゴール前の左カブの急斜面で飛ばされてしまった。幸い、落ちた所がふんわりとした吹き溜まりだったので、怪我も無くゴールした事を覚えている。

そもそも私がスキー部に入った動機は、私が、当時スキーでは名門校であった、飯山北校出身であった為、強引に勧誘された事と、スキー部は、毎冬、実家の近くにある志賀高原で合宿する事に、魅力を感じたからである。そのお陰で、四年間毎冬、志賀高原発哺温泉での合宿に参加する事ができた。合宿は厳しかったが楽しかった。当時の宿泊代は、米と味噌を持参する事であった。食事と言えばご飯に味噌汁と野菜菜であったが、温泉に入つた後の食事は大変美味しかった。練習は天候の如何に関わらず、外は吹雪いていても「行くぞ」と言われれば否応無く飛び出して行った。発哺から、ぶな平を滑り降り、そこからスキーを担いでジャイアンツコースを登り、木戸池まで行って直滑降の練習を繰り返して、スピード感覚を身につけた。帰りの、木戸池からジャイアンツコースを滑り降りる事は楽しかったが、降りた所から発哺まで、スキーを担いで登るのは、疲れも加わり、大変きつかった。今日の志賀高原は、リフトやゴンドラが張り巡らされていて、スキーヤーにとっては大変便利になっているが、当時の志賀高原で、リフトがあったのは、丸池の米軍基地にあった二台だけだったので、滑る為

にはどうしても、スキーを担いで斜面を登るしかなかった。そのお陰で、今でも足腰は丈夫である。又、途中立ち寄った丸池のヒュッテでは、時々、越路吹雪や、三木のり平、フランキー堺等が仲間達と来ていて、芸能人ならではの、垢抜けた楽しい雰囲気を、味わう事が出来た。

私は現在七十一歳、今でも薬剤師として調剤薬局で働いている。それ迄は、製薬企業で三十四年、日赤病院で六年、六十三歳で定年を迎えたが、六十四歳の時、心筋梗塞を起こし、急遽、心臓のバイパス手術(四本)を受けた為、滑れるようになったのは、三年前からである。今年の冬も、無事に滑ることが出来た。私がスキーを通して培った、勇気、決断力、根性、忍耐力、計画性、協調性、人の和、体力等は、社会と言うゲレンデで、大いに役立った。毎年、十二月の第一土曜日には、関東地区に在住する富山大学スキー部のOBで、都合のつく人は、東京、新橋にある「和かな」に集まって、酒を酌み交わし、一年間の出来事や、来るべきスキーシーズンの計画等について語り合っている。この集いは、昭和四十七年頃から今日まで続いているが、会社のOB会とか、同級会等に無い親交の場として、楽しい雰囲気を味わえるのも、スキーをやってきたお陰と感謝している。

五十年を振り返って

金沢大学(昭和四十六年卒)

大 谷 吉 生

常任理事として既に「中部日本学生スキー連盟エリート・スキーヤーの育成に向けて」で寄稿させて頂いたので、ここでは自分の人生五

十年について書かせてもらいます。

五十才になるとなんとなく人生の先が見えてきたようで、これまでの自分を振り返り、自分の人生はこれで良かったのか、あるいは、これから何か違う人生を歩みたいと思うのは私だけでしょうか？一九七九年に修士課程を修了してアメリカに渡り、三年後に博士課程を修了して帰国、そして大学に勤めて二十年以上が過ぎてしまいました。金沢大学の定年は六十五才なので大学で教鞭をとるのは後十五年しかありません（十五年もある？）。

ご存じのように、国立大学は、今年、平成十六年四月から法人化され、手厚い（？）文部科学省の保護の傘下から外されました。「教官（公務員）」は「教員（非公務員）」となり、教育・研究だけでなく、外部資金の獲得を含めた大学運営まで、多くのことを要求されるようになりました。法人化されて以来、会議・出張の数は圧倒的に増え、研究・教育に費やす時間は大幅に削減されてしまいました。誰もやらない研究をし、優れた学生を社会に送り出すのが大学へ勤めた理由だったはずなのに、今はそれも難しくなってきました。しかし、今の職を捨てて新しい仕事に挑戦する度胸もなく、大学で何をすべきか、何ができるかを考え、悩んでいるのが今の自分のような気がします。

実はこの原稿は、アメリカの学会に来て、ケンタッキー州の田舎（携帯もインターネットも使えない！）のホテルの一室で書いています。大学にいと、人生何をすべきか考える余裕すらないというのが本音で、アメリカに来て始めて自分のことを考える時間ができたという状況です。二十五年前にアメリカに渡り日本から離れることによつて（当時はインターネットがないから情報的にも）初めて自分がどういう人間なのか見つめられたのと同様に、今、アメリカの携帯もインターネットも繋がらない部屋に居て、全く同じことを繰り返している自分に気がつきました。このような状態で一つだけ確信したことは、これまで「出会ってきた人が自分の財産」であるということです。アメリカに来れば信じあえる研究仲間がいる、大学に戻れば自分を信じてくれる学生・同僚がいる、会社に行けば頑張っている教え子（師弟関係なのである意味で自分の分身）がいる、スキーに行けば競技スキー

を通じて知り合った信じられる仲間がいる、というわけです。このように考えると、今の自分の仕事とは関係ないスキーで知り合った仲間には、利害関係がない（？）から、「信じられる」という最も大きな財産だということですね。梶原さんには、学生に対してどのように接したらよいか悩んだとき、大きなヒントをもらいました。「自分を信じて、自分を学生にぶつけること」。東樹さんには、人生の生き方（楽しみ方？）を学びました。やるときには徹底的にやる（飲むとき、遊ぶときには徹底的に飲む、遊ぶ・・・東樹さんごめんなさい）。ここまで書いたら、これから「自分のなすべきこと」に対する答えが出ました。「自分を信じて徹底的にやる」ことですね！ 梶原さん、東樹さん、有り難うございました。

中部学生の思い出

金沢大学（昭和四十七年卒）

山下 忠五郎

金沢駅発午前四時（頃と記憶している）急行北国、直江津、釜飯（駅弁）、大系線、信州森上、ごお津旅館、岩岳スキー場、西山スキー場、西山グラウンド、西山ヒュッテ、新田、切り久保の田圃、ジソギスカン、白馬錦、野沢菜漬、雪乞い、裸踊り、岩岳大滑降、雪上運動会、ヤマトスポーツ、トンキン竹、十五km、三十km、リレー、回転、大回転、滑降、一部、二部、丸坊主、OB会。

小学校の頃、竹スキーの経験しかない私が金沢大学スキー部に入部したのは、昭和四十三年九月でした。傷害の趣味となりつつあるスキーとの最初の出会いだった。出会ったスキーは細くて長い代物。訳も

分ならず、スキーは準備されていることで喜んで入部した。そのスキーが走るスキーで、初めて乗ったのは年末合宿で新田の田圃に立った時だった。当時は、ストックはトンキン竹でよく折ったことを覚えていた。やまとスポーツに何回通ったことか・・・。

中部学生で印象に残っているレースは、昭和四十五年一月の三十km・七・五kmを四周。リタイヤする選手が出るほど過酷なレースだった。私も二時間以上走ったと記憶している。そして、昭和四十六年一月の三十kmが再レースとなったことである。悔しかったことは、四年間一度も一部で走ることが出来なかったことである。入部した前の年に二部に落ち、一部に上がることができなかったのである。

中部学生でスキー競技と出会ったお陰で、就職してから中部日本大会や国体に出場することができ、学生の頃とはまた違った体験や人との出会いを経験することができ、多くのことを学ぶことができた。

今では、スキー(勿論アルペン、近年はボードも)が家族の共通の趣味になっている。これもまた、金沢大学スキー部に入部し、中部学生での競技生活があったればこそとありがたく思っている。

これから学生生活を送る皆さんにも生涯の楽しみとなるよう、中部学生が何時までも続くことを期待したい。一OBとして、何らかの形で力になりたいと思っている。

来年一月四日、岩岳スキー場でOB・OG大会が開催されることを楽しみにしている。 シーハイル！

学生スキー・中部インカレを通じて

名古屋経済大学(平成十四年卒)

榊 原 輝 昭

社会人になった現在、大学生活を振り返ってみるとスキー中心の生活を送ってきた四年間でした。そんな四年間の中で一番思い出に残っているのが、三年生のときの中部インカレです。一・二年の頃は、カールビングスキーがよく分からず納得のいかない大会で終わってしまいました。一年生のシーズンは終盤から徐々に滑れるようになり、又、自分の滑りを客観的にみることもできるようになりました。そして、弱点であるフィジカル面のトレーニングなど、目的意識が明確になってきたので、三年生からは集中してスキーに打ち込むことができました。そして、迎えた三回目の中部インカレで三部ではありますが、入賞することができました。初めて賞状をもらったことよりも、それまでに努力してきたことが実を結んだことがうれしかったです。

大会や学生スキーを通じて、仲間の大切さや努力すれば必ず報われることなど多くのことを学んできました。辛いことや嫌なこともありましたが、最後まであきらめずに一つのことに打ち込んできた四年間は、私にとって一番充実した日々を過ごした学生時代だったと思います。

中部日本学生スキー大会の思い出

長野大学(平成十六年卒)
齊 木 真 司

中部日本学生スキー選手権大会では、いろいろなことを学びました。第一に、選手、OB・OGから役員の方まで一致団結し、一つの大会を成功させる素晴らしさを知りました。OB・OGの役員方は仕事があるにもかかわらず、選手のために快く引き受けてくださってとても感謝しています。自分もOBとなった今、先輩方を見習い、後輩達のため、スキー大会のために協力して行きたいと思えます。

次に、勝った時の感動、負けた時の悔しさを学びました。自分達長野大学は、二部に所属していたのですが、一、二、三部合わせての一位を目標に大会に望みました。結果は、惜しくも届かなかったのですが、二部では幾つか優勝でき嬉しかったのですが、出場選手全員に勝てず、とても悔しかったです。

三つ目は、友達の大切さを学びました。長野大学スキー部は部員が少なく、選手役員を出すのが難しい時がありました。そんな時に昔からの友達や参加大学の皆が変わりに役員を出してくれて、とても助かりました。「自分達の大学のスキー部だけでなく、大会に出ているスキー部皆が仲間なんだ。」と思いました。

このように、中部日本学生スキー選手権大会では、スキーを通して、人間関係や、団体行動など社会に出るために必要なことを学べる場だと思えます。スキーをやっていた人達は違うな!と思われるように、これからも皆で協力して大会得才続けて行き、減りつつあるスキー人口を増やして行き、スキー界の発展のために頑張って行きたいと思えます。

中部日本学生スキー連盟五十周年を迎え

名城大学(昭和五十二年卒)
高 橋 稔

中部日本学生スキー連盟が、五十周年を迎えおめでとうございます。五十周年という半世紀もの長い間、歴史ある中部日本学生スキー選手権大会を継続してこられ、本当におめでとうございます。ここまで続けてこれたのも、協賛、支援頂いたスポンサー、スキー場、民宿協会の方々、それと多くの役員の方々の努力、協力があったることと思います。本当に有り難うございます。

私はこの中部日本学生スキー選手権大会が、私自身を、育ててくれた大会でもあり、大学四年間、たくさんの経験をさせて頂き、感動と感激を与えてくれ、思い出の多い大会。スキーと人生を一変させられた大会でもありました。

現役時代はスキー技術の向上を目指し、大学二年の二十一回大会では初三冠王になり、大変喜んだ記憶があります。早いもので、あれから三十年が経ちました。現在は、この経験を生かし、中部学生スキー連盟の役員、全日本スキー連盟の役員をしながら、選手の育成をしております。

今後もこの中部日本学生スキー連盟が、皆様のご協力、ご支援の中に益々の発展と、六十周年、七十周年と継続されることを祈っております。

第五十回中部日本学生スキー

選手権大会によせて

愛知工業大学(平成九年卒)

溝 脇 欽 也

中部日本学生スキー選手権大会が、記念すべき五十回を迎えることを心よりお祝い申し上げます。

中部日本学生スキー選手権大会は、「中部インカレ」として親しまれ、私たちの時代にも、シーズンの一大イベントでした。大会役員、OB役員をはじめ、学生役員も多数参加しての“手作りの大会”という印象が強く残っています。特に旗門員の試験には手を焼いた記憶があります。その他、申込時に何度かやり直したり、大会中のゼッケン回収に遅れたり、何度も怒られたことをよく覚えています。また、同じ高校でやってきた同級生・先輩・後輩たちが違う大学へ進み、同じ大会で競い合う楽しみもありました。大学は違っても、スキーが好きなことに変わりはなく、他の大会とは違った雰囲気でのライバルとの対決に盛り上がったものです。夜になれば、酒を交わしながらいろいろ話したことを覚えていきます。レースのことより、夜の親睦会の方が記憶に残っているかもしれません。

この、「中部インカレ」。大変な大会でした。しかし、その活動に意義があったと思います。社会人となった今でも、中部インカレでの経験が自分の為になっている事が実感できます。たくさん失敗しましたし、たくさん怒られました。それもこれも今となっては笑い話となり、中部インカレの季節になると今でも思い出すものです。また昔懐かしい仲間たちとスキー場で逢うことがあれば、必然的に中部インカレの話題で盛り上がります。それだけ、私たちのスキー人生の中で大

きな大会であったのでしよう。そんな大会を経験することが出来た私たちはとても幸せだと実感するこの頃です。

競技スキー人口が減りつつあり、この大会への参加者も少なくなっていると聞きます。私が所属している岐阜県でもその傾向にあります。スキーに関わる人間として、ジュニアの育成等にも力を入れ、スキー界全体に活気が戻ってくればと思っております。

最後になりましたが、この中部日本学生スキー連盟のますますのご発展をこころより祈念いたします。

中部日本学生の想い出

中部大学(昭和六十二年卒)

阿 部 一 雄

中部日本学生スキー選手権大会第五十回おめでとうございます。五十回もの長きにわたり、大会が開催されてきたのも、諸先輩や関係役員方のおかげであり、大変感謝しております。

さて、中部学生スキー大会での想い出ですが、我が中部工業大学(現中部大学)は当時一部と二部を行き来している状態で、大会へは毎年緊張した思いで参加した事を覚えています。また当時は、他校へスポーツ特待などで雪国の選手が入学し始めた頃で、大会でそれらの選手の活躍などにより、愛知県周辺の出身選手の活躍の場が薄らいできていた年でもありました。そんな中、私はクロスカントリー競技をしていましたが、どうしたら大きな大会で上位に入賞出来るかを考え、中部日本学生には種目はありませんでしたが、ジャンプスクールなどに参加し、コンバイント競技への参加も考えた時期もありました。

今から考えると、当時（二十年程前）は本当に雪がたくさん降った記憶があります。今より道路事情も悪く、諸先輩方は皆公共交通機関を利用して大会に参加していましたが、私達の年位から中部工業大学の場合は車で大会参加が認められた年でもあり、移動には時間がかかりましたが、荷物の面など大変楽になった事を覚えています。

話はクロスカントリ―競技に戻りますが、私が大学四年の時にクロスカントリ―競技では、それまでのクラシカルスタイルの形からフリースタイルへ移行し、競技のスタイルが革命的に変わった年でした。当時、技術的指導など受けられる環境にありませんでしたから、大会へ出場し全く今までの技術が通用せず愕然としたものでした。そんな中、中部日本学生の最後のクロスカントリ―リレーで、アンカーとして出場をした時に最後の選手を抜くことが出来ず、二部に脱落し悔しい思いをしました。次の年には、直ぐに一部に昇格しましたので良かった訳ですが、私にとってスキー競技部は人生の中で「辛抱する」事を教えてくれた気がしています。辛抱してチャンスを待ってれば、必ずチャンスはやってきます。辛抱しなければ物事は必ず上手くいきません。

これからも、大会の発展と末永い開催を望んでいます。

四連覇の想い出

金沢大学(平成十一年卒)

近藤 こそえ

大学スキー界へのデビュー戦、私にとってそれが「中部日本学生スキー選手権大会」であり、ここから熱い四年間の幕がおろされました。北海道出身の私にとってスキーは小さな頃から身近なものであり、自

然と足を踏み入れた競技の世界。しかし、育った地域の学校にはスキー部はなく、いわゆる「レーシングチーム」という集団の中にいた私にとって、スキー部は念願の環境であり、いつも身近に感じられる新しい仲間たちと共に、日々練習を積み重ねる日々でした。

そして、大学一年の冬、大学進学までにブランクのあった私にとって、この年の「中日」は昔の感覚を取り戻すチャンスの中であり、そして挑戦者として挑むことの出来る大会でもありました。久々の試合で、もちろん緊張もあつたのですが、四年間の中で一番思いっきり滑ることが出来た大会だつたと思います。その結果、大回転・回転の二冠を達成することが出来、このすばらしいスタートをきっかけに四年間、思う存分駆け抜けることが出来たのではないかと思います。二年の年は、挑戦者から追われる立場へと一変し、非常に緊張した記憶があります。得意の大回転は何とかタイトルを死守出来ましたが、回転は思うようなペースをつかめぬまま終わり、二位に甘んじました。二年目のジnkクスという言葉を感じような年でした。大学三年、幹部となるこの年は特に大学の名の重みを感じながらのシーズンでした。自分のことだけでなく、チーム全体のことを考えながら取り組んでいくこのバランスに悩んでしまうこともありましたが、自分が成績を残していくことでチームの雰囲気も盛り上がるのではないかと考え、望んだシーズン。大学の授業の関係で大回転のみの出場となりましたが、三連覇を達成することが出来、最終学年での集大成を完成させるステップとなつた年でした。そして大学四年、この年は四年間の中で一番辛く、しかし一番輝ける年となりました。卒論など思うような練習が出来ず、更に大会直前に最愛の祖母を亡くすという試練にぶつかり、一時はもうダメかと諦めかけた心を奮い立たせたのは、周りの仲間の熱いサポートと大回転四連覇への強い意志でした。「絶対に負ける訳にはいかない！」と自分に言い聞かせ、望んだ本番。四連覇達成の瞬間は今でも鮮明に思い出すことが出来ます。そのくらい私にとっては強い信念をぶつけることが出来た大会でした。

大学卒業後は地元北海道に戻り、一時は仕事の忙しさでスキーから離れてしまった時期もありましたが、現在は社会人のスキーチームに

所属し、楽しく競技を続けております。平成十五年二月には念願だった北海道代表で地元北海道開催の「名寄国体」にも参加することが出来ました。

このように目標に向かって努力し続けていくというのは、「中部日本学生スキー選手権大会」から学んだことのひとつである。振り返ることが出来ます。歴史ある「中部日本学生スキー選手権大会」、ここに参加した多くの選手が大会を通していろいろなことを学び、感じ取り、そして良い刺激を受け続けていることと思います。そして、これからもこの大会は多くの後輩たちにとって、大切な場所としてあり続けることを期待します。

最後になりますが、この大会にご尽力されている関係者の皆様に対し、感謝の気持ちでいっぱいです。今後も、「中部日本学生スキー選手権大会」が発展し続けるよう、北海道の地から願っております。

朝日大学で過ごした四年間

朝日大学(平成十六年卒)

阿部 裕 助

私は朝日大学のスキー部でとても有意義な四年間を過ごしてきました。私にはスキー部で多くのことを学んできました。それは社会に出た今でもとても役に立っていると自負しております。

大学一年の春、競技スキーはまったくやったことがないのにスキー部に入りました。スキーのいろはも分からなかった一年生の私に先輩方を始め、コーチが優しく、厳しく、丁寧に教えてくれました。そのおかげで、私はスキーが上達し楽しめることが出来ました。そして絶

対負けたくはないライバルが出来ました。ライバルの存在が私自身のスキーレベルの向上に繋がりました。

大学生活はスキー部のために費やしたと言っても過言ではありません。そんな生活が私を成長させてくれました。季節を問わず、私の頭は四年間スキーでいっぱいでした。毎年、シーズンインが待ち遠しくしていたのを懐かしく思います。社会に出てからできることもあれば、学生だからこそ出来ることも多くあります。それを大切に、一生に一度しかない大学生活を思い出深く実りのあるものにしていくと欲しいと思います。

中部学生スキー大会に出場し、仲間も増えました。また、いろいろな人のスキーを見て勉強にもなりました。中部学生スキー大会は私にとってとても思い出深いものです。

現役スキー部の皆さんにはこれからもスキー人口を増やし、とても勉強になる中部学生スキー大会を盛り上げて欲しいと思います。もちろんそれは朝日大学だけではなくどまりません。いろいろな大学が協力し合い、最高な中部学生スキー大会をこれからも築いていくと欲しいと思います。

就職し社会に出た今でも時間があればスキーに行っています。一緒に思い出と一生のスポートであるスキーの楽しさをもっとたくさんの人たちに知ってもらいたいと思います。

スキーの楽しみを

名古屋工業大学(平成十二年卒)

奥 省 太

この度は中部日本学生スキー選手権大会開催五十周年まことにおめでとございます。心よりお慶び申し上げます。

私がお世話になっていた頃から四年がたちますが、今も「中部インカレ」と「岩岳」という言葉は特別です。一年生の私は、濃い霧と雪の降る視界の悪い中、ジャージと黒いデモパンという格好で、先輩方の大声援の中スタート。頭の中は真っ白。旗門の順番は赤、青、赤、青。要注意のスルーも間違はなく、安全に廊下を抜け、先の見えない正面へ。板がない？こけてる！？板をなんとか履いて再スタート。ゴーグルの中まで雪だらけ。あつという間に眼鏡が曇り、視界ゼロ。もう一回こけてふらふらでゴール。履いていた黒いデモパンが、雪で真っ白で誰だかわかんなかったと笑われてしまいました。

不思議なことに、この散々なレースが私のスキーに対する楽しさをより深めてくれました。もつと楽しく滑るためにもつと上手くなりた。そう思いながら今もスキーと関わっています。この大会で多くの選手の皆さんがスキーの楽しさをより深めて、少しでも長くスキーを続けてくださることを願っております。

がんばれ！

愛知学院大学(平成三年卒)

川口 邦泰

私が生まれて初めて、スキーのスタート台に立ったのが、この中部インカレでした。「何で競技スキー部なんて入っちゃったんだろ」と恐怖で体を震わせながらコースを見下ろしたのを今でもはっきり覚えています。結局そのレースは散々な結果に終わり、自分の未熟さを思い知らされ落ち込んでいました。初めての大会でそんな悔しさを味あわされ、それで降私にとっての中部インカレは何年生になってもその悔しさの仕返しに来る、目標の大会になっていました。練習に身が入らないときも、この中部インカレを思い出すと「なにくそ！」という気持ちになりました。

実は一年生のときにコテンパンやられたとき、生意気ながらこっそり立てた目標がありました。「中部インカレ優勝」です。一年生の下手くそがこんなことを公言しては先輩に何を言われるか分からないので、ひっそりと自分の胸の奥にしまっておきました。それからというもの、その目標だけを目指して必死で練習に打ち込みました。そしてがきながら少しずつ順位を上げ、最後のシーズンには目標には一歩及ばなかったものの、準優勝を飾ることができました。あの時、大それた目標を立てなければきっと入賞もできなかったのではな。いかと、今になって思います。目標を持ってそれに向かって突き進めば必ず夢はかなうこと、身をもって体験しました。社会に出てからも目標、夢を持つことを忘れずに毎日ですこしています。「目標を持って突き進めば必ずかなう」と私は中部インカレに教えてもらい、それを知っているからです。

毎日練習に励んでいる選手の皆さん、どうか夢や目標を持ちそれを成し遂げるために頑張ってください。きっと満足のいく結果が出ると思います。がんばれ！

スキー人口が減少し、毎年参加者も減っていることが残念でなりません。このような形でしか応援できませんが、この手作りの暖かい大会がこれからも毎年盛大に開催され、選手の皆さんの心に残る大会でありますようお願いしています。がんばれ！

中部インカレ

中京女子大学(平成十五年卒)

平井 久美子

中部インカレではたくさんの思い出ができました。先輩や後輩との仲も中部インカレを通して仲よくなることができました。私の大学は女子大のため、旗門員などの仕事は大変だったけど男子校生と一緒に協力し、仕事を行いました。いろんな大学生とも仲よくなり楽しい大学生活を送れました。

最近ではスキー人口も減少しているけど、この大会は長く続けてほしいと思います。仕事をしているOGもいるのでなかなか手伝いに行く事が難しいけどできるだけ参加していきたいです。

OB一筆

福井工業大学(平成十六年卒)

戸田 浩 敬

私が大学時代競技スキーをしていて、一番楽しかった大会は中部学生スキー大会でした。大学から競技スキーを始めたので、一年生のときは最初の大会が中部学生スキー大会だったので、スタート台に立ったときはすごく緊張しました。成績は悪かったのですが、来年は入賞できるようにがんばろうと目標にもできたよい大会でした。また、我が大学のOBの方や他の大学の選手とも交流することができたので、よかったと思います。特に他の大会では、卒業してしまったOBの方に出会う機会がありませんので、OBの方に会えるということは、多くの学生とOBで大会を運営されている中部学生スキー大会ならではの思い出だと思います。最初、私は選手が審判をやっていたので、変わった大会だなと思っていました。また、私が部長を任されて大会役員として出て頂くOBの方を探す時、少し苦労しました。私の大学は、毎年出て頂けるようなOBがいなかったので、卒業したばかりの先輩方に必死に頼んで出て頂いたのを覚えています。その時は、大変だったのですが、今となっては審判をするといった責任や、我が大学のOBの方と交流をもてたというのは大変貴重な財産だと思っています。三年生の時の成績は三部で優勝し、チームの目標であった二部昇格することができた年でした。OB役員で来て頂いていた先輩も喜んで頂けました。私たちのクラブはスキー初心者から始めたものが多かったのですが、自分たちの手で勝ち取った優勝という結果は大きな自信になったと思います。そして四年生のときは、二部で優勝することができました。大学から始めた競技スキーで一部に昇格できたときは何事にも変え

られない喜びでした。卒業してしまつて一部でレースに出ることはできませんでしたが、四年間毎年すべてのレースに出させてもらつて、とても楽しかったです。近年、参加大学と各大学のスキー部員共に少なくなつてきているようです。しかし、過去五十年の歴史を有する中部学生スキー大会であるので、決してこの歴史を無くしてはいけなと思ひます。そのためにも、我が大学はもちろん他大学も協力し、この大会でしか経験できないものがいかに貴重な経験であるかを、まだ参加していない大学に広め、私たちの子供も中部学生スキー大会に参加できるように大会にしていけるよう祈つていきます。

五十周年によせて

信州大学(昭和四十二年卒)
花岡 實

五十周年を迎える中部学生に、心から「おめでとうございませう」と、お祝いを申し上げ、この大会を支えていただいている関係機関や諸団体の皆様、また、お世話になつた多くの皆様に敬意と感謝を申し上げます。たいと思ひます。

定年を一年後に控えた現在、数ある思い出の中でも、この中部日本学生スキー選手権大会は、忘れられない大会の一つとして今も心奥に焼き付いています。

私は教員をやつていて関係で、昨年は、校長会の代表として、長野県中学校体育連盟のスキー部長をさせていただきました。母池高原スキー場での県大会、妙高高原スキー場での全国大会と、将来の活躍が期待される中学生諸君と一緒に大会に臨み、自分の若かりし頃と重ね

合わせて、血湧き、心踊る大会の雰囲気味わいました。

私が中部学生スキー大会に出場したのは、第十回大会から十三回大会までの四大会です。第十回大会では、後々まで語り草になつた強烈なデビューでした。中日新聞では、「番狂わせ」、中日スポーツでは、「大番狂わせ」の見出しがついたほどでした。出場選手百三十余名中、百三十番近くのスタートで、大回転一部優勝という快挙でした。本人始め誰も予想しない結果でした。当時の信州大学スキー部は、部員数は多いのですが、八学部のスキー部の寄せ集め所帯でした。この大会の参加申し込みに当たつて、前年度実績のない者や初出場者は、エントリー順は後ろでしたので、結果として、その他大勢組に入つての出場でした。

第十回大会は、滑降、回転、大回転の順番に日程が組まれていたと思ひますが、スタート順は、いずれも百三十番前後でした。滑降競技では十四位、回転八位と順位が上がリ、最終日の大回転優勝につながりました。翌年からは、エントリー順は、一挙に一桁になりましたが、結果としては、十一回大会の大回転三位、十三回大会の滑降三位に終わりました。しかし、この中部日本学生スキー選手権大会が引き金となつて、大学二年の時にはインカレに出場でき、三部滑降で二位に入賞しました。また、大学卒業後、教員になつてからもスキーを続け、冬季国体スキー競技会に長野県代表として八回出場、三回の入賞を果たしました。

また、スキー環境に恵まれた小谷・白馬の両村の小中学校に十二年間勤め、数多くのスキー選手の育成に携わることができました。後に、インカレ一部での優勝、デモ選での優勝など、全日本トップクラスのスキー選手になつた子どももいて、自分だけでなく、スキーを通して、選手を育てる楽しさを味わうことができました。

いずれにしても、今は遠い昔の思い出となつてしまいましたが、この中部学生の大会が今後も盛会にいつまでも続いてほしいと願つていきます。

「スキー賛歌」

信州大学(昭和四十一年卒)

武田 克明

私たちの過ごして来た学生時代は、学生運動が激しくなる少し前の時代です。その頃から学生の間でスキー熱がかなり上がって来たと思います。その頃の信州大の競技スキー部は各学部スキー部の選抜された者がインカレや中部学生大会に参加していました。私のいた繊維学部はスキー部も多い時代で五十名ぐらいのスキー部員がいたと思います。ほとんどの部員は大学に入って初めてスキーをはく人が多かったと思います。したがって先輩たちは後輩にスキーレッスン等の合宿でした。それだけスキーの楽しさをその中から見出した部員が多かったと思います。スキーツアーを計画したり、競技のためポール練習をしたりで今までにくらべスキーを楽しみながらかなりのんびりしていた時代です。私も学部より選抜され、インカレや中部学生大会に備え合宿に参加しましたが、大会ではよい成績はほとんどありませんでした。数年前三十数年ぶりに中部日本大会の競技に部門員として参加させていただく機会がありました。今と昔では大会の規模も又選手たちの用具も大違いです。でも選手たちの目は今も昔も変わらなれど、思いがたけに苦しさに耐えてひたすら頑張っている選手、その中にこそ青春があるのだと思いました。

還暦も何年前か前に過ぎ、今思うのは学生時代スキーに過ごした楽しかった日々のことです。そして一緒に過ごした仲間達のことです。社会に出てその頃の時代がどれだけ励みになったことか。まさに「オーシーハイル」です。

中部学生は学生の目標

愛知大学(平成十五年卒)

宮崎 晋輔

今年で中部日本学生スキー選手権大会が五十回を迎えることとなり、大変喜ばしいことと存じ上げます。これもひとえに選手・OBの協力があったからこそだと思えます。私が大学を卒業して二年立とうとしています。大学生活を思い出せば中部日本学生スキー選手権大会のことが一番頭に浮かびます。私と同じようにこの大会が真つ先に頭に浮かぶ人は少なくないはず。それほどまでにこの五十年という歴史は重く、そしてまた人々の心に深く残っているのです。

学生の頃、私はクロスカントリーの選手として何度かこの大会に出場しました。クロスカントリーというのは、アルペンに比べ試合の絶対数がどうしても少ないです。だからというわけではありませんが、この大会のように本格的なクロスカントリーの大会を非常に重視してまいりました。オフからこの大会に焦点を絞ってトレーニングをし、この大会で好成績を収めることを目標にしています。この大会が僕の唯一無二の大会といっても過言ではありませんでした。私のようにこの大会を目標にしている人は、非常に多くいると思います。

年々スキー人口が減少の一途を辿っています。この大会も例外ではなく、私がいどころよりも確実に選手が減っています。このまま選手が減り続けるならこの大会の存続すら危ぶまれる事態になりかねません。この大会のように、五十年という永きに経って学生の目標になり続けた伝統ある大会は今後も末永く続けてゆかねばなりません。そのためにも選手だけでなく、役員のみならず、そして我々OB・OGが一丸となることが必要になっていきます。

最後になりましたが、今後もこの大会が未永く繁栄していくことを願いつつ、微力ではありますがご尽力させていただきたいと思ひます。

全てのスキーヤーに乾杯

北陸大学(平成十四年卒)

金澤啓司

中部日本学生スキー連盟発足五十周年おめでとうございます。私たち、北陸大学スキー部およびOB一同歴史の一端を担えたことを重みに感じ、この先も重みに感じた歴史の一つに名を刻んで、さらなる発展をしていきたいと思ひます。

私自身中部学生大会におきましては、選手として二年、大学のスキー部のサポートとして、二年間参加いたしました。選手として、参加した二年間よりサポートして参加した、二年間の方がはるかに中部学生への重み、学生スキーのあり方を感じる事ができました。

私自身、大会に初めて参加した年と、北陸大学スキー部が初めて大会に参加した年が同年ということもあり、北陸大学スキー部が大会関係者に多大な迷惑をかけたことは、今も記憶に残っております。都市を重ねることに北陸大学スキー部は、少しずつではありますが機能し始めてきました。しかし、学生スキーヤーとして、勉強とスポーツにおいての文武両道に悩まされる日々、他のメジャースポーツに人気を奪われ部員獲得に励んだこと、シーズンスポーツという根強いイメージ、レジャー感覚がある中においての練習や意識のギャップ。そして、スキー以外におけるウインタースポーツの急速なる発達と、様々な環境の中で、いろいろと考えさせられたこともありました。特に、私た

ち、北陸大学スキー部が抱えている一番の悩みとしては、スキー初心者が数多く存在する中で、競技技術よりも用具の準備、スキーに関する知識の少なさ、レジャー的考えの合宿など土台部分を作るまでは様々な事があり、時には部員同士で衝突する場面がしばしば起こりました。このような環境におかれてもなお、大会に参加して入賞、完走してくれた選手達、時には思いもよらぬ好成績を残し昇格を果たしてくれた時の選手達を含めて、心の奥底から「ありがとう」という気持ちがありました。すでにサポーターとして走っていた私はあの当時選手達には、面と向かつては話していませんが、感謝しています。

そして今、私は協議から離れ一人のスキーヤーとして雪国にいます。学生時代に雪が降るたびに感じていた気持ちは、今もなおこの季節がくる度に思い出します。スキー人口が減ってきている中において、私自身、毎年雪の季節が来るとスキーの面白さ、楽しさを周りの人たちに伝え、共感したという欲求ができています。それが一人でも二人でも楽しみを覚え増えていって頂ければと思ひます。

この記念誌を読んでいる皆様は山が好きで、雪が好きで、いろんなウインタースポーツがある中でスキーが一番という方々だと私は断言出来ると思ひます。

この先もスキーヤーであり続けている私自身と全てのスキーヤーに乾杯。

中部学生の思い出

金沢大学(平成5年卒)

高橋 昌也

中部学生五十周年おめでとございます。私が中部学生という大会の存在を知ったのは、平成元年に大学のスキー部に入部して三ヶ月くらいたった時のことでした。先輩がスキー初心者私に対して、「お前はアルペンで中日(中部学生)のポイント取るのは不可能だから、ノルディックをやれ。そしてリレーでポイントをとれ。そうしないとOBの方達に対して面目がたたない。中日一部校は死守しなければならぬ」と言われました。それから、ことあるごとに「中日」、「OB」という言葉を聞かされ続け、すごく悪いイメージの言葉になってしまいました。アルペンの先輩から、ノルディックに行かないのなら辞めるとまで言われました。しかし、顔も知らないOBのために、ノルディックをする気にはなれず、クラブは辞めようと何度も思いました。しかし、アルペンをやるからには頑張れと言ってくださったノルディックの先輩もいたので、一シーズンだけでもやろうと思ひ、ブーツなどをシーズン直前に買った記憶があります。

そして、妙高で冬合宿を行ったのですが、なんとかボーゲンでは確実に滑れるようになりました。そして、中部学生の開催される岩岳に乗り込みました。一年生ですから、学生役員としてコース整備の手伝いをしに行ったのですが、コースは新雪だったので、隊列を組んで、かもしかコースを踏みあがった記憶があります。「つぼ足」というらしいです。そして、その年は三十五周年記念大会で、ホワイトプラザで懇親会がありました。我が金沢大学は、とりあえず壇上で脱いだと思つのですが、中身入りの缶ビールが飛んできました。そして、ダウ

ンヒルの前夜は怖くて緊張して寝れなかったことを覚えていますが、ゴールした記憶がありません。急斜面の手前でコケたのかもかもしれません。三年生くらいになると、ポイントをとってチームに貢献したいという気持ちが非常に強くなり、アルペンを選んでしまったことを非常に後悔していました。また、中部学生に出場して、一部校を守ることは、チームの中がギクシャクしたり、いやな気分になることの元凶ではないかとも思っていました。そして、四年生の時に二十年間続いた一部校から落ちてしまいました。OBの役員の方も目に涙を浮かべていました。部員の中にも泣いているものもいましたが、私はとても泣けるような気分にはなりませんでした。その時代は参加者数が七〇〇人前後もあり、その中で六位に入賞してポイントをとることなんて、その当時の自分の技術では、オリンピックでメダルをとることぐらいに不可能なことだったので。つまり、オリンピックで、惜しくもメダルを逃した人は、悔しくて泣くと思いますが、なんとか参加できて喜んでいる人が、メダルがとれない自分に対して悔しいとは思わないことと同じです。夏場は陸上部のように、やみくもに走りつづけていましたが、中日一部でポイントゲットというほとんど不可能な目標に対する、行き場のないエネルギーで走っていたように思います。

そして、五年(留年)の時には、三十五人くらいにまで部員が増えたのですが、サークルのようになりつつあったスキー部を見て、ようやく中日一部を目指すこと、守ることの大切さが自分なりにわかったのです。その困難な目標は、OBや先輩のためのものではなく、自分たちの為にあるものだ、ようやく気づきました。先輩に(冗談まじりで)、「自分でスキー部をつぶしておいて、自分で立て直している」とまで言われましたが、学生最後の年は、先輩たちに伝えるものは、すべて伝えてしまおうと必死だったと記憶しています。五年の時は、十二月に骨折してしまい、中部学生のOB役員として、お手伝いすることはできなかつたのですが、翌年の社会人一年目に参加させてもらいました。そのときは選手の数が八〇〇人おり、極めて忙しかつた事を覚えています。そして、ようやく、大勢の方の努力なしでは大会は開催できないことを、身をもって知りました。また、その大会では、

金沢大学のノルディックの選手が二人倒れて救急車で運ばれるというハプニングもありましたが、男子は二部優勝で一部昇格を決め、女子は一部で優勝するという場面に立ち会うことができ、感動させてもらいました。それから毎年というわけではありませんが、大会のお手伝いをさせて頂いています。実は、OB役員として参加して得たものは、学生として参加した時よりも、数十倍大きいと思っています。その事については、つぎの機会に書きたいと思っています。

中日大会を関して学んだこと

岐阜薬科大学(平成十三年卒)

森 昭 則

岐阜薬科大学を卒業して何年か経ちましたが、記憶をたどると、一番に思い起こされるのは、部活のことだと思います。

雪の降らない季節に、主にしていました。陸上トレイニングでした。スキーは、脚力が必要不可欠なので、マラソンの様な、脚力、体力、精神力を鍛える練習を多くやっていました。そして、冬が来ると、待ちわびたようにスキー場へと車を走らせ、半年ぶりの雪の感触を楽しみました。この時期になると、中日大会の開催時期も刻一刻と迫り、その大会を意識しながら、冬合宿に臨んでいたような気がしません。

中日大会は、主として、大学生が日頃の練習成果を披露する場だと思っています。ここで、良い結果を残すことが出来れば、本人にとって、意味のある大会になるでしょうし、また、例え、残した結果が本人の期待したものでなかったとしても、大会という一つの目標に対し努力

し得たものは、かけがえのない大きな財産になるでしょう。

時代が変わり、私が感じた事と、これから中日大会に出場していく人達が、感じていくだろう事とは、多少の違いはあるかもしれませんが、その根底にあるスキーへの情熱は、多かれ少なかれ、同じだと思います。

仲間達とともに自分を磨くことができた中日大会に感謝していきすし、今後もこの大会を通して、学生の皆さんが、自分を磨いていく事ができれば、幸いだと思うと同時に、中日大会の益々の発展を祈っています

成長させてくれる中部学生

北陸大学(平成十六年卒)

三 木 優 樹

第五十回中部日本学生スキー選手権大会がここに開催されることをOB一同喜ばしく思います。私たち北陸大学競技スキー部は、発足してまだまだこれからのクラブですが、OB自身、また現役学生ともこの大会を通じて大きく成長したいと思っています。

今日、スキー人口が減少していく中で、この様に毎年中部学生スキー選手権大会が開催されることは喜ばしく、これからの一層の発展を期待しております。この大会があつてこそ私たちOBは大きく成長したことも社会に出て実感しています。

社会に出て特に感じたこと。それは、クラブ活動を通して得たチームワークだと思っています。社会に出て最低限必要なことをクラブ活動を通して学びます。それは、互いにかわす挨拶であったり、チーム

ワークであったり。クラブは、友人同士の集まりではありません。言葉使いをしつかりし、団体生活をする。その中で他が気に意思疎通を形成し、それが大会で応援につながる、また悔しい時や楽しい時に互いに分ちあえ、励ましあえる大切な仲間作りを築きます。

北陸大学は、基礎スキー部から始まり、そして競技スキーへと成長しました。その影には、顧問を始め学生自身また、何より大会を運営されている関係各社の皆様のお力があってこそだとOB 現役学生とも思っております。四年間という短い学生生活の中で、卒業時「スキーをやっていてよかったこのメンバーに出会えてよかった。」と一人ひとりがそう感じられるクラブ作りはこれから先、いつの時代にも必要なことだと思います。それには、一人に力だけでは限界がありません。その時に、支えあえる仲間がいることの大切さを教えてくれたのは、自分たちで大会を支えあう何よりこの大会であると思っております。OBになってもこの大意会を忘れることはできません。それは、やはりOB大会役員として後輩たちと一緒に参加できるからだと思えます。また、後輩たちがしつかりと先輩達の意思を受け継いでくれ、この大会で成績よりも大切なチームワークを得て帰ってきてくれるからだと思えます。

これからの中部日本学生スキー選手権大会の一層の発展を願い、北陸大学OB会はこれからも大会を支えていきたいと思っております。